

Title	エリー・アレヴィ著 トーマス・ホジスキ
Sub Title	Elie Halévy; Thomas Hodgskin, translated by A. J. Taylor
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.12 (1961. 12) ,p.1113(77)- 1118(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19611201-0077
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611201-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611201-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

格はその定常解に接近していく。故に価格の上昇は $y$ 、 $z$ が上昇する場合にかぎって可能であることが知られ、これは諸部門の生産能力に相対的な自発需要の増大と、また労働生産性の上昇を上回る賃銀率の引上げとが、インフレの起動因となることを物語るものにはかならない。

なお(四)式あるいは(五)式の構造から明らかのように、このモデルでは、第1—第 $k$ 部門の価格はそれぞれ自らの部門の価格だけからし

か影響を蒙らないが、第 $k+1$ —第 $n$ 部門の価格は、他の部門の製品が費用因子として含まれるかぎり、そのすべての価格から影響を蒙ることになっている。さきにも触れた前者の部門のそのような分離性をどう改訂し、一方的な連結の関係をどう双方連結の關係に拡充するかは、今後に残された重要な課題である。

(1) Goodwin, *op. cit.*, pp. 16 ff.

書 評

エリー・アレヴィ著『トーマス・ホジスキンの』

(Elie Halévy; Thomas Hodgskin, translated by A. J. Taylor, pp. 197, 1956, London.)

飯 田 鼎

エリー・アレヴィの名は、「十九世紀英国民史」(The History of the English People in the Nineteenth Century, 7 Vols.)という歴大な研究をもって早くから知られている。ここに紹介を試みるホジスキンの伝記的理論的研究は、すでに著者がフランス語で書いたものの翻訳である。従って書評というには、必ずしもふさわしくないが、本書を利用した文献や論文がすでにあらわれつつあるとはいえ、ホジスキンの生涯について知られていることがあまりにも少ないと思うので、本書を読み終って感じたことを記しておくことも全く無意味ではないと思う。

訳者テラーの序文によると、著者アレヴィは、一八七〇年に生まれ、一八九〇年にパリのエコール・ノルマルルに入学した。そしてパスカルとスピノザとを並行して研究し、一八九六年、その最初

の著作「科学にかんするプラトニ学派の理論」(La Theorie Platonicienne des Sciences)があらわれた。彼は一八九八年まで、エコール・デ・シアンヌ・ポリテクの教授をしていたが、やがてジェレミー・ベンサムおよびデイヴィッド・ヒュームの思想および生涯に関心をもつに至った。このようにして十八世紀フランス啓蒙思想の英國功利主義にあたえた影響を辿りつつあったアレヴィは、さらに進んで功利主義と古典派経済学の理論との關係に注目するようになった。だがアレヴィが、功利主義思想を中心とするイギリス社会思想の研究に本格的にとりくむようになったのは、フランスの歴史家テイヌ(Taine)を通じて、当時イギリス功利主義研究の權威であったレスリー・ステイヴン(Leslie Stephen)に紹介されたときにはじまるといわれる(p. 11)。このような契機をえて彼は、英國のすぐれた哲学者や思想家と知り合ったのであって、そのなかには、パーランド・ラッセル(Bertrand Russell)、グレアム・ウォーラス(Graham Wallis)、シドニー・ウェップ夫妻(Sidney and Beatrice Webb)、トレヴェリアン教授(Prof. G. M. Trevelyan)およびハモンド(J. L. Hammond)などの錚々たる人物がいたことは、彼の研究を、哲学的研究と同時に、イギリス社会経済思想史および政治思想史にむけさせることに、大いにあずかったのではないかと思われる。さて、まえおきはこの程度にしておいて、本書の内容をみると、三章にわかれる。第一章、一七八七年から一八三三年まで、第二章、一八三三年から一八三三年まで、第三章、一八三三年から一八六九年まで、結論、文献となっている。

筆者はかねて、リカードウ派社会主義者——もちろんホジスキンのみならず、タムスンやブレイなどもふくめて——が、イギリス労働運動とどのような関係があったのかという点について、ひそかに関心をもってきた。つまりリカードウ・ソーン・ソーン・ソーンと称せられる人々が、ベンサム・リカードウという功利主義・古典派経済学というブルジョア・イデオロギーの根強い影響と、ロバート・オーエンの社会主義思想——オーエン自身もリカードウおよびベンサムからかなりの思想的影響を受けたことが感じられるのであるが——との間で、労働者階級の運動にどのような理論的基礎を提供したかということであった。ホジスキンの場合などは、いわゆる「労働擁護論」を通じて、団結禁止法撤廃のために努力したことは知られているが、しかし問題は、彼らは、その後、つまりオーエンやチャーティストの時代以後どうなっていくのか、どのような思想的遍歴を重ねてゆくかということであった。最近わが国でもリカードウ派社会主義者にかんする研究がたかまり、その文献的研究も軌道にのりつつあることは喜ばしいが、その理論的・歴史的研究はこれからであるといわなければならぬ。この意味で、アレヴィの研究がもつ意義はきわめて大きいと考える。

さきに指摘したように、ホジスキンは、十九世紀初頭のさまざまな思想の痕跡を認めることができるのだが、著者によれば、一八一三年当時、水兵としての青年の生活をまとめて「海軍の訓練にかんする随筆 (An Essay on Naval Discipline)」を書き、そのなかでジョン・ロック、ペーリーおよびマルサスの弟子であることをの

べているといわれる。そして著者は、ホジキン自身が、みずからキリスト教徒であるけれども、内面の思想の反対者として、功利主義者および個人主義者として、自己を確立したとべていることを指摘しつつ、「ゴドウィンの影響のもとにあったと信すべき理由はないであろうか」と疑問を提起しているのは面白い(53)。ここでわれわれは、タムスンにたいするゴドウィンの無政府主義の影響を想い出すが、とにかく、リカードウ派社会主義者に共通なことは、その理論的不透明性、そらいうのが妥当でないとするれば、その複雑多岐な性格であって、ホジキンもその例外ではなかった。

ホジスキンは、フランス・ブレイスを通じて、ベンサムとも知り合ったのであるが、彼は、反政府的な「無政府主義体制」を信じ、一方また功利主義の無神論にも反対するという矛盾した思想をもっていたといわれる(55)。

一八一五年、戦争が終ったばかりのヨーロッパを旅行し、そこで大きな収穫をえた。フランスからイタリーそしてスイスをおとすれ、中世紀の壮大な遺跡やモニュメント、教会および美術に驚嘆しながらも、彼の心は、なにか満たされなかった。フランス農民の絶望的な状態とイタリア人民の窮乏が気にかかっていたのだ(56)。

しかし彼はこのとき、フランス・ブレイスの勧告に従って、ドイツ北部地方の旅行記をまとめる構想を明らかにし、これのうちに、一八二〇年「北部ドイツ旅行記」となったのである。彼はドイツ旅行において、フランスおよびイギリスの民主主義的な動きに刺激されて、ドイツ民衆の間かなり自由主義的な運動が昂まっ

ているのに注目し、大政治家、外交官もしくは將軍たちとは接触しないで、むしろ旅行商人 (commercial travellers)、労働者および農民たちと語り合った結果、法律をつくった人ではなく、法律に従わせられ、税金や罰金を払った人々を知るようになった。アレヴィは、この「ドイツ旅行記」を、ホジスキンの社会政治思想の形成に大きな関係があるものとみて、とくに絶対主義的なドイツの政治、小封分立に悩むドイツ人民にたいして、封建遺制との闘いを訴え、その奮起をうながしている点を強調しているのは印象的であるが (pp.43—51)、おそらくこれは、彼のその後におけるベンサム主義への熱心な傾倒への伏線として、つまり封建的な専制君主の国ドイツとブルジョア革命の凱歌がたからかに奏されている祖国イギリスとの対比において、ベンサムのイデオロギーの彼にたいする圧倒的に根強い影響が浸透していったと考えてよいであろう。

しかし興味深いことは、丁度この時期、つまり、ドイツ旅行から帰ってきた直後、彼は出版されたばかりの——リカードウの「原理」は、一八一七年に初版がでた——リカードウの著書『経済学および課税の原理』にあらわれた労働価値説、とくに労働の非生産的性格についての見解に基本的な意見の一致をみたのであったが、同時に、彼は「資本の蓄積」という現象にたいする当時の経済学者の理論に疑惑と批判の眼をむけたのである。彼はブレイスにあててつぎのように書いている。

「……だがわたくしは、理性からも感情からも、資本の蓄積にたいして友人であったことではない。それは一般に、極度の儉約と、

不正のなかではじめられ、わたくしにとっては、不公正を永久化し、少数の者にたいしては、多くの人々の抑圧のもととも強力な手段のひとつであるようにみえる。わたくしは、資本の蓄積を讚美する経済学者の理論の敵である。……」(57)

一八二三年までの彼の青年時代は、このように、一方においてリカードウにたいする批判の刃をときつつも、ベンサム主義の根強い影響のもとにあった。従ってその限りにおいては、自由貿易主義の熱心な支持者であった。ただ彼は、ベンサムの影響をうけたために、現実の法体系に注目するようになり、やがて、実定法の理論が自然法の存在と全く矛盾することを知るとともに、更にベンサム主義そのものの不徹底な性格をも批判するに至った。すなわち、ベンサム主義は、支配者と被支配者との利害の調和の機関として議會を規定し、民主主義的議會の理念を想定したのに反し、彼はすでにゴドウィンの影響をうけて、「いかなる政府も存在しない社会」を胸に描いたのであった (pp.55—56)。

またマルサスの人口論にたいしては、仮りに、「人口の増加が食料の増大を凌駕しても、人間のみじめさの原因を法律よりもむしろ自然に帰せしめる人間の無知こそ問題である」と非難し(58)、更にマルサスおよびリカードウの地代論および利潤論にふれ、その賃金生存費説の誤謬を説く。マルサスおよびリカードウの価値論および地代論批判の部分は、一八二〇年五月二八日、フランス・ブレイスにあてた手紙に明らかであり、この全文を、アレヴィはブリティッシュ・ミュージアムのブレイスのマニュスクriptから見出し、

本書に掲載しているが(pp.61-70)、まことに貴重な、重要な資料であって、本書のうちの必読部分をなしていると思う。

つぎに彼の生涯の第二期であるが、この時期は、第一期において彼が資本主義批判の思想を体系づけたのにつづいて、労働者階級の運動と接触を保つに至った非常に短いけれども重要な一時期であり、有名な「労働擁護論」(Labour Defended Against the Claims of Capital, 1825)や「通俗経済学」(Popular Political Economy, 1827)が出版されたのもこの時期である。

彼は、ロンドン滞在の最初の月に、工場労働者と共に機械工に科学的な知識を授けるために、週刊誌の刊行を準備していたロバートソン(R. C. Robertson)と協力して、「機械工の雑誌」(Mechanics Magazine)を発刊した。その目的は、「毎週、読者である機械工に、証明図絵をもってあらゆる新しい発見、発明および改良……および鉱物学および化学の実際的な応用、労働の節約の計画および示唆、あちこちの国々の技芸の状態にかんする報告(Reports of the State of the Arts in this and other Countries)および卓越した機械工の追憶や、ときとしては肖像などを提供すること」であったが、「ホジスキンの秘かな望みは、スピットルフィールドの不满を抱いている絹織工に、この保護された産業部門における彼らの経済的な条件が、保護されない産業における労働者のそれよりもはるかに悪いということを明らかにすること」であった。

その後間もなく、グラスゴウにおいては、幾人かの労働者が集まって、科学および技術の教師を雇い、永久的な基礎の上に立つ学校

た一八二五年、「資本の要求にたいして擁護されるべき労働」(Labour defended against the claims of capital)として発表したのである。

のちにロバートソンとも別れ、「機械工雑誌」の編集責任者の地位を去ったが、やがてバークベック機械工学校の経済学の講義をもつことになった。フランシス・ブレースは、ホジスキンの革命的思想の労働者への影響をおそれ、これに抗議したが失敗し、その結果、歴史哲学と心理学の二つの新しい講義が開かれたのであって、「通俗経済学」——アレヴィイによれば、俗悪化させられたのではなくて一般の聴衆の水準に上げて書かれたのであるが——は、今日のいわゆる『プロレタリア経済学』として、その第一巻が出されたのであった(pp.91-92)。以下これにかんする詳細な紹介がつづくのであるが、要するに彼の理論の特徴は、労働価値説を支える哲学的基礎として自然法思想——これはまたブルジョア階級による私有財産および資本の利潤の擁護の根拠でもあるのだが——を採用していることである。しかしその結果は、全労働収益権の高唱にもかかわらず、ブルジョア民主主義の最後の断片を払拭せしめるのを妨げたのではなからうか。政府の階級的役割にたいする鋭い洞察にもかかわらず、オーエンの共産主義およびサン・シモンの集産主義にたいする彼の反対は(9, 110)、個人主義にたいする彼の信仰に根ざすものであると同時に、その思想的矛盾を象徴してはいないだろうか。要するに一八二三年から第一次選挙法改正の年一八三二年までの十年間は、彼の理論が確立された時期とみなしてよいであろう。しかしその理論のなかには社会主義者としての資本主義にたいする熱烈な

(Institute)をつくったが、やがてそれは一八三三年エディンバラおよびリヴァプールにもつくられ、ついにロンドン機械工学校(The London Mechanics Institute)が建設された。この設立に貢献したフランシス・ブレースやロバートソンをはじめ、ラディカル・グループの人々の協力をえて、彼はこの新しい機械工学校の臨時の書記にさせられたが、ロバートソンとともに、その理事(a member of the administrative commission)に選ばれなかったため、その経営は、有給の職員の手に行ってしまうという弊害を生み出したのである。

一八二四年、フランシス・ブレースやジョセフ・ヒュームらの巧妙な政治的かけひきによって、悪名高い団結禁止法は撤廃されるのであるが、同時に資本の攻勢も強まり、新たな弾圧立法の危険さを感じられるほどになった。ホジスキンはすでに、ペンサム主義者との間に、思想上の対立を生じていたけれども、「いかなる場合にも、自分がその思想の宣伝のために必要とした機械工学校と別れはしなかった」(p. 88)というように、労働者階級の主義主張を強めると同時に、資本主義の経済学の誤謬を明らかにするために、一八二一年にピアスイ・レイヴンストーン(Piery Ravenstone)によって書かれた興味深いパンフレット、「人口と経済学の問題にかんして、一般に考えられている若干の見解の正しさについで」の「三の疑問」(A few doubts as to the correctness of some opinions generally entertained on the subjects of Population and Political Economy, London, 1821)のテーゼを修正し、これをさらに発展させ、団結禁止法が撤廃され

批判にもかかわらず、やがてその矛盾を拡大させることになる弱点がひそんでいたのである。

一八三二年から一八六九年までの壮年および老年時代は、初期の社会主義運動の理論家としての特異な地位をしめながら、ジャーナリストとして活躍中、チャーティストと知り合い、やがてその暴力的な傾向を嫌悪し、ついにコブデンやブライトの自由貿易論に共鳴してゆく思想的・理論的転換の時期であった。この当時、彼がハンサード(Thomas Hansard)と協力して議会報告書の公刊に長い間努力したことは(p. 130)記憶されるに値しよう。「モーニング・クロニクル」、「デーリー・ニューズ」、「ブライトン・ガーディアン」、「イラストレイトッド・ニューズ」に寄稿したり、あるいは編集にたずさわったりするジャーナリストの生活のなかで、彼はリカードウの理論をめぐって、マカロックやジェームズ・ミルなどと論争をつづけたのであって、ひとたびは、独自の史的唯物論にまで到達したこともあった(p. 134)。

しかし一八五〇年代に至ると、リカードウ派社会主義者としての彼の立場は転換をはじめ、J. S. ミルおよびスペンサーとの交友の結果としての進化主義への傾斜か、それともイギリス資本主義における産業革命の不安と激動から「世界の工場」への変転か、あるいはその両方とも思われるが、こうした背景のもとに、一八二五年に、労働者の団結を擁護したホジスキンは、三〇年後の一八五八年には資本家的な論理への転換、イギリス資本主義の発展に幻滅され、かつてはペンサムやブレースと不利におちいりながら、いまは

その当のブルジョア・ラディカルに近づいてゆく姿がみられた。アレヴィは豊富な資料を引用して、その晩年における理論家としての全面的な後退を克明に追求している。

ミシェル・フォントネ著  
『ペイザンと農村のマルシャン』  
(Michel Fontenay: Paysans et marchands ruraux.)

渡辺 國 廣

すでに余白もつきたので、これ以上の論究は割愛しなければならぬが、この研究を精読して研究上の重要な問題と思われる諸点は、(一)ホジスキンのペンサム主義との関係、(二)ゴドウィンの無政府主義思想の影響、(三)労働者階級の運動にたいする理論的影響、(四)カードウの価値論および差額地代論にたいする批判など、その理論的・実践的活動が実に複雑多岐にわたっていることである。そしてなお最後にマルクスへの影響を考えなければならぬが、これと同時に、本書を一貫して著者が主張しつつづけていっているものは、イギリス資本主義発展のまにまに生み出されたブルジョア・ラディカル——哲学的にはペンサム主義——の影響から、ホジスキンのまぬかれることができなかったという事実である。まことにスタークがいったように、ホジスキンは、けつきよく、自由主義的原理を放棄することによって、自由と平等とのあいだに生じたおおきな衝突を解決した……。ロックとスミスの平等主義的理想から出発したトーマス・ホジスキンは、最後には、産業革命がうみおとした資本主義の階級社会に妥協することとなったのである<sup>(1)</sup>。

(1) W・スターク「経済学の思想的基礎」杉山忠平訳(東洋経済新報社)一九六〇年、一四九—一五〇頁。

経済変動のなかで致富に成功した『ブルジョアジー』にその座を奪われてしまった。『ブルジョア』は領主にまで上昇することのなかで事態の收拾を続けていった。整理はいわば領主制の再生ということとを軸として進められたのであった。それがいかなる経過をたどったか。またそのことによりどんな事態が結果したか。本書ではそういったことの究明が直接の課題である。具体的には上記の村々でこの時期にパリの『ブルジョア』の一人が領主支配を確立する過程と、これによる波紋を問題とする。著者によれば、この界限はそうした問題提起に答うべく適切な条件の下にあった。とにかく疲弊は激しかった。加えてそこはパリに近く、富裕な『ブルジョア』が容易に触手を伸ばすことができた。土地は依然として最後の保証であった。いわば十七世紀フランス農村の縮図をそこに見出すことができるといっているのである。問題がそこには集約して伝えられており、著者がこの地方を選んで十七世紀の問題を展開したのも決して理由のないことではなかったのである。

二

ヌーフヴィル家の遠い祖は魚を扱う商人で、十六世紀の中葉にはその仕事で得た富を梃子に王の顧問にまで上昇することができた。爾来シャルル九世、アンリ三世、アンリ四世、ルイ十三世と宮廷に出仕し、ルイ十三世からルイ十四世の時代にはその功が認められ、コルベール西方に領主として君臨することを許された。そして一六六三年には正式にヴィルロワ公領の発足となった。ヌーフヴィル家

フランス農業史の研究で十七世紀は長く空白のまま放置されて来た。革命の理解に齟齬があれば、原因の重要な部分はその事情に帰せられはしないか。こういう反省から最近にいたり十七世紀の農業史に大きな期待が寄せられるにいたった。フランスでこの時期以上に再検討を要する時期はなく、その結果は驚くべきものとなる。そうした期待から十七世紀の究明が今日フランス経済史の研究で大きな課題の一つにまでなっているといっている。こうした雰囲気の中で本書はまとめられた。直接にはパリの西に近く位置する一かたまりの村々が取上げられる。いわば事例研究でしかないが、期待に沿う力作である。史料を豊かに盛込んだ点、わが国の研究者にとっても十分参考になる。

十六世紀を通じて封建危機が続いた。十七世紀にはいつて農民の一揆が各地で頻発し、困難は募るばかりであった。しかしフロンドの乱の終結を最後に混乱は去り、十七世紀後半はいわばその整理期に当たった。混乱のなかで十三世紀来の領主は没落を余儀なくされ、

が領主支配を貫徹していった時、その基礎は何か。最初に著者もまたこの問題に関説している。  
周知の如く、十三世紀以来領主は『ランティエ』化していた。しかし新しい領主はこれと違い、著者によって一義的に『ファルム』の所有者として把握されていた。ヌーフヴィル家は領主支配を貫徹していくことの中で、『ファルム』設定に重大な努力を傾け続けた。この家の祖は商人の出であり、それだけに土地に対する関心が強かった。『ファルム』は地片を一つ一つ、長期にわたり執拗に購入するといふ過程を通じて形成された。そしてこのことがヌーフヴィル家の伝統といわれるまでになっていた。かくして一六九二年までにヌーフヴィル家はヴィルロワ領内の一〇カ所に『ファルム』を所有するようになった。農村で窮乏は深く、それだけにことは容易に進行し得た。最大規模の『ファルム』で四五〇アルパン。『ファルム』は耕地、牧草地、葡萄園からなり、一般に葡萄園はかなり小規模であった。しかし『ファルム』を構成する地片は一つ場所に集中していない。それを一つに統合しようとする努力は認められる。しかしこの段階でそれが完全な成功を収めることは困難であった。地片は散在のままの状態であることが多かった。土地が『ファルム』のなかに組込まれたということはそれ自体所有権の移転を意味した。しかし単にそれだけにとどまり、いまだこの段階でそれは経営の仕組に变化を迫ることができなかったのである。旧農法はそれほどに強力な存在であった。著者の指摘によるまでもなく、『ファルム』の設定は旧農法の枠内のことであり、その限り地片の統合ということとは